

# 日本におけるイエズス会士の 布教方法への一考察

葛 井 義 憲

- 一 問題の所在
- 二 布教のための日本人分析
- 三 同化か順応か

## 1 問題の所在

これまで「キリシタン」研究の名のもとにおびただしい数の研究論文が発表されてきた。そしてそれはこの小論で取り扱う16・7世紀の「キリシタン」研究にもあてはまることである。けれども、それらは文献学・言語学・書誌学研究<sup>1)</sup>、日欧交渉史研究<sup>2)</sup>、文化史研究<sup>3)</sup>などに片寄っており、宗教学・宗教史研究論文<sup>4)</sup>の占める量ははなはだ些少である。それは「キリシタン」研究のもつ特殊性によるものであろう。というのは、それは海外に今なお埋もれて残されている大量の史料の発掘と考証、日本と「ヨーロッパ」とのはじめての出会い、ロマンチズムをかりたてる異国趣味、弁証的立場の堅持などを錯綜させて内包していたからであろう。そしてそれは当然の帰結であるかのようにこの種の研究を偏向させ、しかも「キリシタン」研究を専攻しない研究者の批判を受ける<sup>5)</sup>とともに、彼らに誤謬を起させることにもなる。

そしてそれはイエズス会(Societas Jesu)の体質の理解にもあてはまることであろう。イエズス会はこれまで日本史家から反動的、保守的、侵略的な会とみなされるのが通念であった<sup>6)</sup>。それは従来の研究成果と相俟ってイエズス会の成立原因と構成メンバーに起因するものであろう。というのは、この会はプロテスタント運動に対抗する尖兵的役割を果たすために、またローマ・カトリック教会の「近代化」推進のために結成されたのである<sup>7)</sup>。しかもその活動、

とくに海外布教は、当初の構成メンバーがイベリア国民であったことから、イベリア半島にある二国家の「新大陸」への航海や探検や征服と軌を一にしていた<sup>9)</sup>。こうした事柄から、イエズス会に対する臆断が生まれたのであろう。だがそれは彼らが論述するほど狂信的な反動集団であったのであろうか。ただそれが対抗宗教改革（Gegenreformation）の先鋒であるという理由からだけで反動的だとか、また征服者や植民者と軌を一にしたということからだけで侵略的だとい切ってしまうことができるのだろうか。

たとえば16世紀の「ヨーロッパ<sup>9)</sup>」は、『インディオは人間か』という論争を真剣に戦わしうる社会であった<sup>10)</sup>。つまり、これは植民地化を志向する社会であることを表わしているのであるけれども、その背後に、ローマ・カトリック教会を枢軸として形成・統一された地理的、文化的「ヨーロッパ」の絶対化から生じた固陋な閉鎖的な「世界観」や「人間観」が歴然と存在していることを示すものである。こうした「ヨーロッパ人」の閉鎖性や固着性に関して、詳細な調査資料にもとづきインディオの「人間性」を実証し痛烈な批判をしたのがイエズス会士アコスタ（José de Acosta, 1540-1600）たちであった<sup>11)</sup>。

つまり、日本史家からは反動的、保守的とみなされているイエズス会士が当時「ヨーロッパ」における「普遍的な世界観や人間観」の形成に寄与し、また侵略的だと考えられた彼らが結局は植民地化の足をひっぱることを行っていたといえるであろう。すると16世紀の彼らのローマ・カトリック教会の「近代化」運動は、反動的運動というよりもむしろ発展的運動の様相を多分に示している<sup>12)</sup>。換言すれば、これは「ヨーロッパ人」の固陋性や閉鎖性を打ち破り、「相対的な世界観・人間観」を志向する運動であった。私たちはこうした彼らの志向性が「非ヨーロッパ人」である日本人と遭遇したとき、どのように展開されていき、またそれをもっていかに布教していったかを考察してみたい。

ただここで付記しておきたいことは、この小論では「イエズス会士の布教方法」のみを対象として取り扱っているのであるが、「布教の内容」、つまりどのように福音が宣べ伝えられ、そしてそれに接した人々がどのような反応を示し、またそれを信じ受け入れた者たちがどのようにかえられ生きていったかをも含めた「布教の内容」を視野の外におき忘れていてのではない。現在それに

ついて研究中であることを一言断っておきたい。

## 2 布教のための日本人分析

宣教師が福音を宣べ伝えるにあたって、宣べ伝える相手に関心を抱き、観察を行うのは必定であろう。イエズス会士の日本の地からの第一報であるザビエル (Francisco Xavier, 1506-1552) の1549年11月5日付の鹿児島からゴアの会友にあてた書簡にも、彼の日本人観察が記されている。彼は同年8月15日に鹿児島島の地に一步をしるすまで、マラッカで出会った日本人アンジロウらから日本のことを聞く以外には日本のことを知る手立てはなかったのである<sup>13)</sup>。しかし彼を日本布教へと促したのは、アンジロウらの資質と彼らを通して知った当時の日本の状況であった。日本に関するかぎられた不十分な手懸りであったとはいえ、そのなかに彼の興味をそそるものがあったのであろう。そして彼は今、目のあたりに日本を見、彼を動かした衝動は間違っていなかったことを確信したのである。ザビエルは「まず第一に、私たちが今まで接したかぎりにおいて、この国民は私たちの出会った国民の中で最も傑出していた。私たちは『異教徒 (ies races infidèles)』の中で日本人をしのぐ者はないように思う。交際して、これほど感じの良い国民はいない。彼らは総体的に良い性質を有し、悪意がない。彼らは名誉意識に関して驚くほど強烈である。彼らはなににもまして名誉を尊ぶ。彼らは総体的に貧しい。だが貴人 (武士—葛井注) であれ、そうでない者であれ、貧乏を恥だとみなしていない<sup>14)</sup>」といっている。

彼はこれまでゴアやマラッカなどで会った「異教徒」とは異なる人々に出会ったのである。名誉意識を尊び、貧乏を恥としない者たちに触れたのである。これは彼にとっていささか驚きであったであろう。彼をも含めた「ヨーロッパ人」の精神支柱でもある騎士道精神につながる名誉意識が極東の「異教徒」の人々の中にもあったこと、そして修道士の生活である貧乏を恥としない清貧の生活が行われていたことははなはだ不思議なことであった。彼はいう、「彼らはキリスト教徒がもっていないと思われる特質を一つもっている。つまり、貴人がたとえ貧しくとも、貴人でない者がたとえ富裕であっても、貧困な貴人はあたかも富める者のように尊敬されている。この貧困な貴人は、たとえいかほ

どの富が積まれようとも、貴人以外の者とは結婚しない。賤しい者と結婚することによって自らの名誉を失うと考えるからである。すなわち、彼らは富よりも名誉を重んじるからである<sup>15)</sup>。」

彼が日本人の貧困生活の状況に関して特記したのは、この書簡をしたためのまでの数ヶ月間に彼自身が経験したことがあまりにも斬新なこととして映ったためであろう。彼には、「異教徒」がこれほどまで「ヨーロッパ人」と類似した生活を送っていることを予期できなかったようである。だから、彼はなおも日本人の特質（節度をもち、賭博や盗みを嫌い、侮辱を恥とする国民）について感情の高揚を押さえきれないまま書きつづけているのである<sup>16)</sup>。こうした彼の観察は、短期間であったことから粗雑さをまぬがれえなかったとはいえ、興味深い。私たちは彼に従ってきたトルレス (Cosme de Torres, 1497-1570) の1551年9月29日付のインドの会友にあてた書簡の中に同様の記事を見出すのである。

「日本人は世界中の何国人よりもわが聖教の植付に適したるものなり。彼等は甚だ思慮深く、イスパニヤ人と同じく、或はそれ以上に道理をもって己を律す。彼等は予が知れる諸国の人よりも多く知識を求め、いかにして靈魂を救ひ、また彼等を造りたる者に仕うべきかにつき語ることを喜ぶこと、新発見の各地に彼等に及ぶ者なし<sup>17)</sup>。」

トルレスは日本ほどキリスト教を布教するに相応しい国はないと感じたようである。それは日本人が思慮深く、道理をもって自らを律し、知識欲に富み、救済に非常な関心を抱く国民であるからである。つまり彼には、日本人がこれまでに会うことのできなかつた好奇心の塊のような人間に思えたのである。しかも、それは日本布教に携わったイエズス会士が共通して認識した特性であったため、彼らはそれに非常な興味を覚えたのである。しかし日本布教当初は、それに対する日本人の心理分析にまで至らず、好奇心をいかに満足させるかというところまでとどまっていたようである。ザビエルが1552年4月9日ゴアから総会長ロヨラ (Ignatius de Loyola, 1491-1556) にあてた書簡の中で日本人の好奇心に関して述べ、日本に派遣される宣教師は天文学に精通した者がよいと進言している。というのは、日本人は天文学に未知であったが、天体の運行、

日蝕、雪や霰、雷鳴や稲妻等々の自然現象に大変な関心を示していたからである。したがって、これに精通した宣教師は、即座に彼らの心を把握することができる<sup>18)</sup>。

彼の進言している小手先だけの布教論は、彼自身の滞在期間の短さに起因した致し方のないものであったのだろうが、日本で地道に布教していた宣教師たちのなかには、これに関して懸命に模索・探求していた者たちもいた。そのなかに、日本語の辞書編纂に貢献したロドリゲス (João Rodriguez, 1561-1634) もいる。彼はそれについて次のように記している。

「この東洋のあらゆる人々の中で、彼らは神聖なものに対する帰依や崇拜を最も強くもっている者たちである。彼らは偽りの神々に長命・健康・富・繁栄・子孫などの現世的な恵みを得ることを望むばかりでなく、来世の救済をもひたすら願っているのである。つまり彼らは、偽りの誤った道においてさえそうなのである。この証拠はこの王国にある壮麗な寺院、偶像を拝む僧侶と救済の師に示された大いなる尊敬と崇敬、彼の行う信じられないほどの苦行、断食、肉類・生物(なまもの)に対する節制、偶像に対する数々の祈願と喜捨において示されている。(中略)福音が日本に宣べ伝えられてからは、偶像に対するこの信心や熱心さは人々の間で急激に冷めていった。というのは、彼らは継続的に真理について聞き、これが彼らの闇を晴らしつつある。神の思寵によって真理を受け入れた人々は、この生来の性行に大いに負っており、これは充分に色々な場所や状況で示されている。救いと来世のことを心から願っている良き性行と関心のお蔭で、私たちの主はこの国を憐み、他の多くの国々をさておいて、神は彼らを求めてこの世の果てまでやってこられたと思える<sup>19)</sup>。」

彼は日本人の好奇心の裏にあり、そのエートスになっているものは「求道心」であると述べている。つまり彼らの現世的な事柄に対する異常な執着は、突き詰めれば来世の救済を追い求める「悲壮な願望」に依拠していると考えられるからである。だから、彼らに永遠なる救いを示す福音を宣べ伝えれば、即座に布教成果があがることは間違いない。それは仏教に対する信仰が「急激に冷めていった」という「事実」からも実証される。けれども、彼はここで彼らに福音を弘布することで得られる一応の成果を見ながらも、もう一步突き破って、

布教活動を発展させることのできない壁の存在にも気づき始めたのである。

「日本人は中国人や朝鮮人以外の者と接して知識を得たことも交際したこともなく、世界の果てのこの地で育ったので、当然彼ら自身につき、また彼らの民族についても自信をもっている。したがって、彼らは傲慢で気位の高い性質の持ち主である。彼らはたとえ他の諸民族に関していくら見たり聞いたりしても、いつも自分たちが最上であると考えている<sup>20)</sup>。」

ロドリーゲスは布教活動の障害を日本人の閉鎖性や固陋性から生じる傲慢さだと見ている。彼は自らの語る「言葉」を拒否されることは納得のできないことであると考えたのであろう。なぜなら、彼も「白紙」でもって日本人と日本文化を総体的に観察し、彼らに適した布教方法を探り出して、それでもって彼らに語りかけているのに、なおも胸襟を開かずには排斥するのは<sup>21)</sup>、大海を知らない正に極東の「田舎者」の思い上がりであると感じたのであろう。しかし、これは裏をかえせば、彼も傲慢の謗りを受けなければならないのである。なぜなら、彼は彼らに歩調を合わせ、彼らに適した方法で布教していることを誇示し、そしてその方法で成果があがらなくなると、自らの「優越観」を「表面」に出して相手を傲慢だと罵倒するのである。

私たちはこのような布教方法を同化(Assimilation)を基調とした布教方法とみる。同化とは、布教者が福音を宣べ伝えるに際して、社会生活・文化生活と宗教生活を同一視して<sup>22)</sup>、布教者が育まれた文化パターン、すなわち、慣習、生活様式、嗜好、思考方法など全てを至高・至善なもののみなし、これでもって布教地の人々をキリスト教徒とする。つまりそれは、布教者が自らの文化パターンを唯一の理想型のみなし、人々の全存在をそれに擬することである。そしてそれが人々を「完全に救われた人間」にする唯一の道である。ただそこで注意しなければならないことは、「擬する」とはあくまでも擬することであるので、それは同一になることでなく、擬似のままでありつづけることである。それゆえ、この布教方法でもって改宗した日本人は「ヨーロッパ人」になることは決してできず、それより一段下の「亜ヨーロッパ人」に甘んじつづけなければならない。そしてそれは日本が「亜ヨーロッパ」にとどまりつづけなければならないことを意味する。

私たちは彼らがこうした同化を基調とした布教方法をもちだす背景には、同時代の「ヨーロッパ人」が抱き絶対に信じていた彼らの「世界観」や「人間観」を払拭できずにひきづらなければならなかった「時代の子」としての限界を内包していたことを知る。するとロドリゲスもやはり「時代の子」であったのであろう。しかし彼もイエズス会士として「隣人」のための布教に携わろうとしていたはずである。けれども、彼の中に血肉化した自らの文化パターンへの信奉はあまりにも強靱であったために、それに同調せずに独自の道を模索する者たちは彼には傲慢と見えたのであろう。

しかし、こうした「日本人観」は、なにもロドリゲスのみが抱いたことではなく、日本で布教していた他のイエズス会士の中にも同様な考えを抱く者たちも少なからずあり、特に日本布教長カブラル (Francisco Cabral, 1533-1609) はそれを表面化させたのである。彼は日本人を傲慢で、横柄で、感情的な者たちであると公言した<sup>23)</sup>。これは日本布教長という役職にあった彼の日本布教における苦慮と悲観から生じたものであり<sup>24)</sup>、またC. R. ボクサーの語るように、「ポルトガル人のアジア人蔑視<sup>25)</sup>」によるところもあったのかもしれない。しかしカブラルにしても、他の宣教師にしても、当初から悲観的な布教しかできないと思って来朝したわけではなかったであろう。彼らも日本布教に期待をもって来朝したはずである。ただ彼らの予想に反して、彼らの同化による布教方法では頑強な日本人を容易に改宗させることができないと知ったとき、彼らの希望は消え、焦慮と悲壯観だけが残ったのであろう。だがこうした同化方法に対して疑問を投げかけるイエズス会士もいたのである。その旗頭が1579年7月25日にロノ津に一步を印した巡察師ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano, 1539-1606) である<sup>26)</sup>。彼は同化ではなく順応 (Adaptation) の布教方法を語るのである。

「日本人の性格、風習、挙動は、我等のそれとははなはだしく異なり、相反しており、彼等はヨーロッパの他の諸修道会が有する慣習を受け入れることができない。(中略)このことは、我等の心を日本人の心に、日本人の心を我等の心に合致させることが大いに困難であることによって、明白に認められ証明されるのである。この困難の原因は、あらゆることにおいて見出される矛盾性

である。彼等はこの（種々の）反対の（諸現象）の中に固く腰を据えていて、いかなる点においても、我等の方に向かって順応しようとせず、逆に我等の方があらゆる点で彼らに順応せねばならぬのである。これは我等にとって、はなはだしく苦痛であるが、もし我等が順応しなければ、信用を失い、なんらの成果も収めることができない<sup>27)</sup>。」

彼は日本文化と「ヨーロッパ」文化とのはなはだしい相違性、日本人の固執性を知ったとき、同化方法をもって行われる布教は停滞せざるをえないと気づいたのである。彼は日本で布教を順調に行っていくためには、日本文化や日本人に順応すること、すなわち、宣教師の鑄型にはめて「亜ヨーロッパ」的文化・「亜ヨーロッパ」的人間形成を拒否することであると知ったのである。すなわちそれは日本文化や日本人の独自性を保ったままで築かれる未知の「非ヨーロッパ」的キリスト教の出現を意味するのである。

私たちはこうした布教方法を順応に基づく布教方法とみなす。順応とは、福音を宣べ伝える相手の保持する文化パターンを尊重し、それを援用して福音を宣べ伝えることをさす<sup>28)</sup>。それゆえこれは布教者の保持する文化パターンや彼らの故国の政治、経済、社会の諸制度をも布教地に導入して移植するのでなく、それらと福音の真理とを峻別するのである。ただ相手の文化パターンを尊重するとは、それと融合（Accommodation）した福音の真理を宣教すること、すなわち換骨奪胎する（骨と胎を借りて使用し、それらのなかに福音を植えつける）のでなく、その異質の文化パターンを通して福音の真理をいかに宣べるかということである。つまりそれは、順応の基底に順応を融合＝習合（Syncretism）へと変容させないための歯止めとして、『イエスはキリストである』という告白、すなわち、福音の真理がつねに厳然と存在していることを示す<sup>29)</sup>。

こうして布教活動を円滑にすすめるために行われた日本人分析は、日本人の異質性を鮮明にし、そして日本にいるイエズス会士の中に『同化』か『順応』かという布教のあり方の対立をもたらすことになったのである。

### 3 同化か順応か

1579年に初めて来朝したヴァリニャーノは、1580年から81年にかけて「公式



会議」を開催した。というのは各地区を視察する巡察師にとって、その地区の宣教師と布教に関する討議を行うことが視察の重要な事柄の一つであったからである。そこで、日本巡察においても「公式会議」が開かれたのである。しかし日本にいる宣教師は遠隔地に広がっていたために、一同が会する「公式会議」開催は事実上無理であったので、豊後、上（都周辺）、下（豊後・日向を除く九州の地域）の3箇所と同様の項目に関して会議を開いた。つまり、この「公式会議」は3回の協議会より成り立っている。第一回の協議会は1580年10月に豊後の臼杵で開催された。この協議会が開かれる前に、80年8月上旬に「予備会議」とも云われる会議を長崎で下の宣教師とともに開いた。ここでは「公式会議」で討議されるべき項目を一応検討したのである<sup>30)</sup>。これ以後81年7月には安土で上の宣教師を集めた第2回協議会が開催され、同年12月には、長崎で下の宣教師を集めた第3回協議会が開かれたのである。そしてこれら三会議で徹底的に討議され、争点になったことは日本におけるイエズス会の布教のあり方であった。

なぜならヴァリニャーノは日本に巡察するまでは日本からの「虚飾」に満ちた報告書を全面的に信頼しなければならなかったが、彼が現実に見た日本での布教活動は報告書とははなはだ相違する様相を呈していたことを知ったからである。というのは、報告書が「読まれる」という性格をもつために、書き手にとって公表しても都合のよい事柄が粉飾・強調されるので、「真相」とはほど遠い表現を報告書はもっていたからである。それゆえこうした報告書に基づく予備知識だけをもって来朝した彼は、実際に日本の現状に触れたとき、ヨーロッパ・インド・マカオに送付されて読まれている日本からの報告書・書簡類の内容との相違に愕然とせざるをえなかったのである<sup>31)</sup>。それはいかに偽りの楽観的内容にすぎなかったかを思い知らされたのである。というのは現実には、報告をはるかに下回る布教活動しかなされていなかったからである。彼は日本巡察以前から、日本布教を推進するにはまず宣教師の日本語習得が必要であると考え、日本布教長カブラルからの日本布教拡張のための宣教師派遣要請にこたえて、1575年から77年にかけて25人の宣教師を派遣する際、この25人に徹底した日本語教育を施すようにカブラルに命じたのである<sup>32)</sup>。けれども、この要

請はカブラルによって握りつぶされ、宣教師のための日本語教育はなされなかった。というのは彼には、日本人に対して宣教師が日本語で説教することなど決して容易にできることではないという考えがあったために<sup>33)</sup>、彼らに日本語を習得させるための機会を設けようとはしなかったのである。

こうした悲観的な日本布教を1570年以来継続させてきたことに対して<sup>34)</sup>、ヴァリニャーノは「公式会議」を開いていくにつれて不安を覚えだした。そしてその不安の実体は、以下の七項目に要約されている。

「第一 F・カブラルのとってきた日本人イルマン (Irmão 修道士) に対する指導は鞭と荒々しい言葉で統治することであった。彼らは自尊心の強い国民であるから、彼らを従順にしておくためには、厳格に取り扱い、屈服させる必要がある。彼はこの教訓を住院に住む全てのパードレ (Padre 司祭) に知らせ、彼自身もそれに基づいて厳しさと怒りでもって語り、彼らを黒人で低級な人間と呼び、名誉を傷つけ、その他非礼極まる言葉で彼らを取り扱ったのである。彼は度々彼らにむかって『結局、お前たちは日本人にすぎないのだ』と言い、彼らが欺瞞に満ちた低級な人間であることを彼らに分らせようとしたのである。

第二 日本人イルマンを蔑視するために、ポルトガル人イルマンと全く違った取り扱いをすべきだとカブラルは思っていた。それゆえ彼は日本人がヨーロッパ人イルマンと同じ衣服や僧帽を着用することを望まず、食事、睡眠、その他の事柄に対しても違った取り扱いをした。

第三 日本人がカブラルらの習慣に適合すべきであって、ポルトガル人が日本人の習慣に適合すべきではない。なぜなら日本人は結局黒人であり、きわめて野蛮な習慣を有していたからである。

第四 日本の習慣にはなじめないということ。カブラルは日本の習慣をつねに親しめぬものとし、これを悪しざまに言った。ヴァリニャーノの第1回日本滞在中、彼らの同僚は日本の習慣を覚えようとせず、休息のとき、またその他の機会にこれをあざけり、自らの習慣の方が優れていることを示した。これは日本人に非常な不快感を与えた。

第五 カブラルは日本人イルマンにラテン語やポルトガル語を習得させるこ

とを許可しなかった。ポルトガル語を教えなかったのは、彼らヨーロッパ人が会話をする際に、日本人に分らないようにし、彼らの秘密を保持するためであった。ラテン語を学習させないのは、日本人に学問をさせず、彼らの中から司祭になる者が出ないようにするためであった。そうしなければ、彼らは尊大になり、手に負えぬような振舞いをなすであろうと考えたからである。

第六 日本人のセミナリョ (Seminario 神学校) を開設しなかったことである。それは日本人がセミナリョに多くの悪徳と不純をもたらすからである。すなわち、それは日本人に研究をさせず、彼らを司祭にも登用すべきではないという彼の考えからでたものである。

第七 カブラルらは、宣教師は日本語を十分に学ぶことができないし、少なくとも日本語で説教することも不可能であり、文法によって日本語を学ぶこともできないとした。事実、彼は日本布教長として13年を過したが、彼自身最も必要な日本語以外は学ぼうとしなかった。また彼は、人々に日本語を文法という形に整える仕事もさせなかった<sup>35)</sup>。

ヴァリニャーノは以上カブラルの布教方法と指導方法を七項目にわけて要約しているが、これは宣教師と日本人の対立が相当激しくなった以降のことであり、また彼自身のカブラルに対する感情的な非難も含まれているようである<sup>36)</sup>。しかし彼の過度な非難を差し引いても、カブラルの方針による日本布教は暗礁にのり始めていたようである。特に、日本人イルマン・同宿・看坊<sup>37)</sup>の不满は相当募っており、彼らと「ヨーロッパ人」パードレやイルマンとの間に陰悪な雰囲気は漂っていたのである。そして当然協力し合うべき両者の反目や対立はおのずから信徒にも反映し、彼らの中にも宣教師批判の影を落しだしていたのである。というのは対立の原因が宣教師の「日本の習慣」、すなわち日本の文化パターンの無視と嘲笑であったからである。そしてそれが彼らを宣教師の司牧下から飛びださせる「教会離れ」を誘発する原因にもなったのである<sup>38)</sup>。

彼が来朝したときの日本の教会は対立と分裂の真只中にあり、10万人の信徒<sup>39)</sup>を困惑させだしていたのである。カブラルの行った布教方針、すなわち、日本を「亜ヨーロッパ」にする方針の破綻が露呈しだしていたといえる。「異質な」高度の文化を保持する日本人は彼らイエズス会士にとって難物であり、

彼らの鋳型にはまりにくい存在であった。カブラルも当初は知力の優れた日本人に布教することを喜んでいたのであるが、彼らの知性や理解力が彼の布教方針を邪魔するものであるということに気づいたとき、それは非常に厄介で嫌悪を感じるものに思えてきたのである。彼は10万人もの「異教徒」がキリスト教徒になったのも、貪欲で偽善的な者たちが打算的な効果を求めて改宗したにすぎないと思うようになったのである。というのは、領主が南蛮貿易のうまみがなくなれば即座に棄教し、その領民全ても棄教させてしまうからである<sup>40)</sup>。彼のこうした日本人に対する批判や非難は封建君主の打算的なイエズス会接近に原因があったのであるが、それ以外に、彼の極端な同化による布教方法にもよっていたと考えたい。こうして、カブラルと彼らとの食い違いは、ヴァリニャーノの個人的な非難をもまじえた七項目の要約が示すように、徹底的な日本人蔑視という方針をカブラルに生みつけていった。たとえそれが彼らとの感情的な行き違いによるところもあったとしても、結局彼には「ヨーロッパ」の価値観を否定する国民や文化を認めることができず、まして異文化の「異質性」を「異質なまま」で向上させようという考えなどは全くなかったようである。だから彼は全勢力を傾けて、日本人が「ヨーロッパ人」よりも劣る国民であることを彼らに認識させようとしたのである。

こうした彼の方針が両者の対立を生じさせ、日本におけるイエズス会を分裂寸前のところまで追いやっていると判断した巡察師は、これに対する打開策を「公式会議」で見つけようとした。そこで、ヴァリニャーノはカブラルを代表とする批判者グループの批判が妥当であるか否かを知らべるために日本人を観察した。以下はその結果である。

「1. 人々はいずれも色白く、きわめて礼儀正しい。1. 国民は有能で、秀でた理解力を有し、子供達は我等の学問や規律をすべてよく学びとり、ヨーロッパの子供達よりも、はるかに容易に、かつ短期間に我等の言葉で読み書きすることを覚える。1. 貧困は恥辱とは考えられていないし、ある場合には、彼等(日本人)(補注)は貧しくとも清潔にして鄭重に待遇されるので、(日本人の)(補注)貧苦は他人の目につかないのである。1. 日本人は、全世界でもっとも面目と名誉を重んずる国民であると思われる。1. 日本人はきわめて忍耐強

く、飢餓や寒気、また人間としてのあらゆる苦しみや不自由を堪え忍ぶ。1. 彼等に見受けられる第一の悪は色欲上の罪に耽ること。1. 第二の悪い点は、その主君に対して、ほとんど忠誠心を欠いていること。1. 第三の悪は、異教徒の間には常に一般的なものであるが、彼等は偽りの教義の中で生活し、欺瞞と虚構に満ちており、嘘を言ったり陰険に偽りを装うことを怪しまないこと。1. 第四の性格は、はなはだ残忍に、軽々しく人間を殺すこと。1. 第五の悪は、飲酒と、祝祭、饗宴に耽溺すること<sup>41)</sup>。」

彼は日本人を礼儀正しく、道理にかなない、忍耐強く、誉れ高い国民であるとみなしている。また日本人の悪い点としては、一夫多妻制、忠誠心の欠如（彼が伝聞した 戦国時代の 下剋上を生みだす日本人の気質をさすのであろう）、人間尊厳の欠如、酒への耽溺などをあげている。こうした観察から培われた彼の日本人に対する見解は、カブラルの日本人を全く低級な人種とみなす見解とは相違していたのである。彼は日本人の長所と短所を観察した結果、日本人を「ヨーロッパ人」より一段下の劣性な人間とみなすのは誤っていると考えた。そして彼は日本を東洋の全地域、またそれまで「発見」されたあらゆる地域のなかで最も重要な地域であると見たのである。というのは、東洋のあらゆる地域では、キリスト教への改宗者は下層階級が大半を占めるのに対し、日本では、学識もある上層階級の封建君主・士族の中からも改宗者が案外でいたからである。さらに、日本人は求道心・探求心の非常に旺盛な国民であり、キリスト教をも十分に理解し、また同一言語を有する国民であるからキリスト教に改宗したのちも指導しやすいとした<sup>42)</sup>。彼には、まさに日本は布教に最適の地と思えたのである。したがって彼は日本布教の成功のためには、宣教師らには全く不可解としか思えない「日本人の異質性」を理解せねばならないと考えたのである。そこで、彼はカブラルの「日本人イルマン・同宿への非難」に対する批判を行った。

「第一 イエズス会に入る日本人を、あらゆる点でヨーロッパ人修道士と同様に待遇し、同宿もその身分に応じて同様に扱うこと。第二 イエズス会の会則に応じて、温和と愛情をもって日本人を待遇し、統轄し、徳操と宗教的贖罪を教えるように努力する。第三 習慣や態度、挙措の異なる他国民に、悪い感

情を抱いたり悪口を述べてはならぬという我等の規則を厳格に遵守すること。  
 第四 主なる神の愛により、我等は日本人を援ける為に、郷里を棄て、幾多の  
 苦勞を経て来たのであるから、我等が日本人に順応するのを嫌うことによって、  
 成果や事業を破滅させてはならない。第五 我等はヨーロッパ人の嗜好をすべ  
 て放棄し、自らを制して彼等の嗜好に合わせ、彼等の食物に適応せねばならぬ  
 43)。」

ヴァリニャーノは、カブラルらが日本布教の破綻のおもな原因をその文化の  
 異質性にあるとし、しかもこれに対処しようとはせず、この破綻を「劣等民族」  
 にのみ責任があるかのようにみなしたことを指摘しているのである。したがっ  
 てこれを繕うためには、この異質性にアプローチする努力をしなければならない  
 のである。そのためには、「ヨーロッパの諸条件や態度、行為によって彼等  
 を導こうとはせずに44)」日本人の風習に融けこみ、日本人に同調した方法で布  
 教しなければならない。つまり布教が「異教徒」を救済することに目的をおい  
 ている以上、その目的を達成するためには、その布教地における最適な方法で  
 布教しなければならない。だから、日本のように全く「異質な世界」と、他者  
 に歩調を合わせることを嫌う国民の中にあつて布教するためには、その国民の  
 生活様式、習慣、言語を習得して、その社会の風土・文化に順応する仕方  
 で布教しなければならないとヴァリニャーノ自身も考えた。

彼のこうした順応に基づく布教方法はこの「公式会議」において大勢をしめ、  
 カブラルの布教方法を押しやってしまったのである45)。そして順応をもって日本  
 布教を行うという統一方針の決定の結果、日本布教のあり方に大きな変化が表  
 われてきたのである。宣教師の日本語習得、日本語の辞書・文典の編纂46)、  
 さらに、日本人の気質・生活方法(食事・服装なども含む)・習慣・礼儀作法な  
 どの比較研究47)。また日本人イルマン・同宿の待遇改善や研修機会の設備48)、  
 あるいは日本人子弟の教育49)。これら一連の順応布教路線が敷かれることで  
 『同化』と『順応』の対立に一応のピリオドがうたれ、1580年から翌年にわた  
 る「公式会議」以降のイエズス会の布教方法が表面的に一応統一されていった  
 のである。

私たちはこの小論で宣教師のみた日本人の特性に焦点をあてて、閉鎖的・固陋的な「ヨーロッパ人」の特性を保持しつつも、イエズス会士として「普遍主義」的な視点を拡大しつづけたという願望をもっている「ヨーロッパ人」宣教師の布教における葛藤とその克服をみてきたのである。そしてそれは彼らが「時代の子」であるという限界を保有しながらも、布教地における「異質性」に目を向け、その意義を認め、そこから、自己の存在の「相対性」を認識し「近代人」に生れかわろうとする変革の軌跡をみたのである。そしてこれによって、反動的・保守的だとみなされてきたイエズス会のなかにヴァリニャーノと彼の立場に賛成する宣教師らにおいて発展的・変革的要素が培われつづけていたことを知ったのである。

今日でも福音宣教に関して日本のみならず他のアジア諸国、アフリカ諸国は依然として布教途上にあるといえるであろう。この際、福音宣教と土着文化の間には、対立、葛藤、融合などさまざまな問題が存在するが、ヴァリニャーノの苦心した布教の方策は今日の私たちに示唆するところが多いと思うのである。

## 注

- 1) 全ての研究論文を網羅することは紙面の都合上できないので、代表的なもののみをあげることにする。

村岡典嗣編『吉利支丹文学抄』、改造社、大正15年。

姉崎正治著『切支丹宗教文学』、同文館、昭和7年。

新村出・柊源一校注『吉利支丹文学集』上・下、朝日新聞、昭和32年—35年。

土井忠生著『吉利支丹語学の研究』靖文社、昭和17年。

土井忠生著『吉利支丹文献考』三省堂、昭和38年。

海老沢有道・松田毅一共著『エヴォラ屏風文書の研究』ナツメ社、昭和38年。

村上直次郎訳『耶蘇会士日本通信』上、聚芳閣、昭和2年。

村上直次郎訳『耶蘇会士日本通信』下、駿南社、昭和3年。

村上直次郎訳『イエズス会士日本通信』上・下、雄松堂、1968年—69年。

村上直次郎訳『イエズス会日本年報』上・下、雄松堂、1969年。

G. Schurhammer, *Das kirchliche Sprachproblem in der Japanischen Jesuitenmission des 16. und 17. Jahrhunderts*, Tokyo, 1928.

E. A. Satow, *The Jesuit Press in Japan, Privately Printed, 1888*.

- J. Laures, *Kirishitan Bunko*, Third ed., Tokyo, 1957.
- 2) 岡本良知著『16世紀日欧交通史の研究』弘文荘, 昭和11年。  
幸田成友著『日歌通交史』岩波書店, 昭和17年。  
松田毅一著『日葡交渉史』教文館, 1963年。  
C. R. Boxer, *Fidalgos in the Far East, 1550-1770*, The Hague, 1948.
- 3) 新村 出著『日本切支丹文化史』地人書館, 昭和16年。  
岡田章雄著『南蛮宗俗考』地人書館, 昭和17年。  
海老沢有道著『南蛮文化』至文堂, 昭和33年。  
D. Schilling, *Das Schulwesen der Jesuiten in Japan*, Münster, 1931.  
G. B. Sansom, *The Western World and Japan*, New York, 1950.  
C. R. Boxer, *The Christian Century in Japan, 1549-1650*, Berkeley, 1951.
- 4) 姉崎正治著『切支丹宗門の迫害と潜伏』同文館, 大正14年。  
姉崎正治著『切支丹伝道の興廃』同文館, 昭和5年。  
姉崎正治著『切支丹迫害史中の人物事蹟』同文館, 昭和5年。  
海老沢有道著『切支丹史の研究』畝傍書房, 昭和17年。  
J. F. Schütte, *Valignanos Missionsgrundsätze für Japan*, Bd. I-1, Roma, 1951.  
J. F. Schütte, *Valignanos Missionsgrundsätze für Japan*, Bd. I-2, Roma, 1958.  
J. L. Gay, *El Catecumenado en la Mision del Japan del S.XVI*, Roma, 1966; 井手勝美訳, 『16世紀キリシタン史上の洗礼志願期』, キリシタン文化研究会, 昭和48年。  
「キリシタン」研究者でない, プロテスタント教会の欧米キリスト教史家の著書のなかで, 16・7世紀の日本キリスト教史を取り扱ったものに次のような書物がある。  
C. H. Robinson, *History of Christian Missions*, New York, 1915.  
K. S. Latourette, *A History of the Expansion of Christianity*, III, New York, 1939.  
S. Neill, *A History of Christian Missions*, London, 1965.  
O. Cary, *A History of Christianity in Japan*, New York, 1909.
- 特にこれらの著書のなかで注目しなければならないのは, O. ケリーの著書であろう。この書はローマ・カトリック教会, ハリストス正教会, プロテスタント教会を視野の中に入れて『日本キリスト教史』を編もうとした意欲的な優れた古典書である。
- 5) 藤谷俊雄著「キリスト教と封建社会」(『岩波講座日本歴史』9所収) 岩波書店, 1963年, 213—7頁。
- 6) 井上 清著『日本の歴史』上, 岩波書店, 1963年, 232—3頁。  
杉山 博著『日本の歴史』第11巻, 中央公論社, 昭和40年, 370頁。



- 7) 石原 謙著『キリスト教の展開』岩波書店, 昭和47年, 501—3頁。  
H. D. Sedgwick, Ignatius Loyola, New York, 1923, p. 53.
- 8) C. S. Braden, Religious Aspects of the Conquest of Mexico, New York, 1966, pp. 18—9.
- 9) 飯塚浩二著『東洋史と西洋史のあいだ』岩波書店, 昭和38年, 63頁。  
彼はこの書で「ヨーロッパは, 地中海世界から閉めだされたことによってヨーロッパになる」と言っている。これは7世紀にイスラム教徒が地中海世界になだれこんできてから始めて, 「ヨーロッパ」はローマ・カトリック教会を枢軸として地理的・文化的に意識され, 形成されていったことを示しているのであろう。そして狭隘な地域に閉じこめられて統一された「共同体」＝「ヨーロッパ」に住む人々は, イスラム教文化に不寛容になり, 「非キリスト教文化」を蔑視し, 忌み嫌い, 否定するという閉鎖性, 固陋性をもつようになったのであろう。
- 10) 『大航海時代叢書』Ⅳ, 岩波書店, 昭和47年, 255—6頁。
- 11) 同上書, 256—8頁。
- 12) イエズス会の『会憲(Constitutiones)』第4部の序論に, この会は, 会員と「隣人」の救済を目的とすると述べている。そして会員には, 「隣人」の模範となることをも課しているために, 鍛錬と学問の修得に励み, 禁欲克己と高德の獲得をも要求されている。これは彼らの布教活動を単に強引な八方破れの活動でなく, 強靱な肉体と精神, 「訓練された明晰」な頭脳をもって布教地を「客観的」緻密に分析・把握し, キリスト教を布教するに値しないとみなされた「非人間」にもキリスト教布教の可能性をみつけだし, それをもって彼らを救済しようとする意図を示している。  
E. A. Fitzpatrick, St. Ignatius and the Ratio Studiorum, New York, 1933, p. 49.  
B. Russell, History of Western Philosophy, London, 1965<sup>s</sup>, pp. 510—3.
- 13) G. Schurhammer, St. Francis Xavier, New York, 1928, pp. 174—6.
- 14) Lettres de S. François Xavier, III, Nouvelle Traduction par E. Thibant., Paris, 1922, p. 14.
- 15) idem.
- 16) idem.
- 17) 村上直次郎訳『イエズス会士日本通信』上, 21—2頁。  
L. Frois, Die Geschichte Japans, I, Leipzig, 1926, S. 18—9.  
L. フロイス (Luis Frois, 1532—1597) はこの書簡を要約して記している。
- 18) Lettres de S. François Xavier, IV, Paris, 1922, pp. 42f.
- 19) J. Rodriguez, Historia da Igreja do Japão ; Translated by M. Cooper, This Island of Japan, Tokyo, 1973, pp. 70—1.  
『大航海時代叢書』Ⅹ, 岩波書店, 昭和48年, 304—5頁。

- 20) J. Rodriguez, *op. cit.*, pp. 65f.  
同上書, 299—300頁。
- 21) *ibid.*, p. 69.  
日本人の心は不可思議で理解しにくい。彼らは三つの心をもっている。一つは口先だけの偽った心。もう一つは友人にのみ明かす胸のうちの心。そして最後は、誰にも明かさなない胸の奥底にある心。
- 22) H. Kraemer, *The Christian Message in a Non-Christian World*, London, 1938, pp. 17-9.
- 23) C. R. Boxer, *The Christian Century in Japan, 1549-1650*, p. 86.
- 24) 彼が頼りにしていた肥前の大村純忠は1571(元亀1)年以降、周辺の攻撃を一身にあびることになり、純忠の実兄島原半島を領している有馬義貞は物質的・現世的な打算でもってイエズス会に近づき、布教活動を支援した豊後の大友宗麟は1578(天正6)年に島津勢に殲滅されるという悲観的材料がそろっていたのである。
- 25) C. R. Boxer, *op. cit.*, p. 54.
- 26) J. F. Schütte, *Valignanos Missionsgrundsätze für Japan*, Bd. I-1, S. 319.
- 27) A. Valignano, *Sumario de las cosas de Japon, 1583*; 松田毅一他訳『日本巡察記』平凡社, 昭和48年, 62頁。
- 28) H. Kraemer, *op. cit.*, pp. 323-6.
- 29) P. Tillich, *Systematic Theology*, III, Chicago, 1967, pp. 186-7, 193f.
- 30) 1. ゴアから極東の副管区を分離させる件。2. 日本の布教区を下、豊後、都の3つの教区に分轄する件。3. 布教の統轄に関する件。4. 各教区のセミナリオに関する件。5. 日本人聖職者養成に関する件。6. 日本人をイエズス会に採用する件。7. 布教拡大の件。8. 教会に奉仕する日本人の処遇に関する件。9. 在日イエズス会士の絹衣着用の件等々。  
J. F. Schütte, *a. a. O.* S. 459-63.
- 31) *A. a. O.* S. 344.
- 32) *A. a. O.* S. 230, 320.
- 33) *A. a. O.* S. 321.  
カブラルは宣教師が告白を聞けるようになるまでに少なくとも6年、説教を行えるようになるまでには15年はかかると思い、日本語を習得することはほとんど不可能であると考えていた。
- 34) L. Frois, *Die Geschichte Japans*, II, Leipzig, 1926, S. 405.  
カブラルの布教方法に対立しつづけたオルガンチーノ (Gnecchi-Soldi Organitino, 1533-1609) も1570年に同時に来朝した。
- 35) J. F. Schütte, *a. a. O.* S. 325-7.
- 36) C. R. Boxer, *ibid.*, p. 87.

- 37) 同宿は説教を行い、教理を説き、教会のための世話をし、パードレたちのための交渉の文書を取り扱う。また、埋葬やミサ聖祭、聖体行列なども手伝う。また看坊は教会の雑役などを行う。これら二つの役職は当時の仏教界にあった役職の援用である。松田毅一他訳、前掲書、90、121頁。
- 38) J. F. Schütte, a. a. O. S. 327-30.
- 39) J. L. ガイ著・井手勝美訳、前掲書、47—9頁。
- 40) J. F. Schütte, a. a. O. S. 318-9.
- 41) 松田毅一他訳、前掲書、5—19頁。
- 42) 同上書、46—8頁。
- 43) 同上書、94—5頁。  
フロイスは「日本の食事」に親しむトルレスの生活態度を記している。そのなかで、彼は日本在住の間、一切の肉食を断って、一当時、イエズス会士は人肉を食べるといふ噂が流布されていた一米と塩づけの魚と野菜を常食しつづけたことが記されている。  
L. Frois, I, S. 37, 52f.
- 44) 同上書、100頁。
- 45) J. F. Schütte, a. a. O. S. 463f.  
この「公式会議」にも出席したフロイスやオルガンチーノら都を中心に布教していた司祭たちは、ヴァリニャーノ来朝以前から、順応による布教方法をもちいていた。彼らは日本人の生活様式、習慣、礼儀作法などへの順応を特に重要視していた。  
村上直次郎訳、『耶蘇会士日本通信』下、386—9、392、415頁。
- 46) A. a. O. S. 321.
- 47) L・フロイス著・岡田章雄訳、「日欧文化比較」(『大航海時代叢書』Ⅹ所収)、岩波書店、昭和48年。
- 48) 松田毅一他訳、前掲書、91—7頁。  
日本布教は日本人聖職者に負わなければならないということが「公式会議」で確認された。
- 49) 同上書、79—80頁。

(日本キリスト教団大和郡山教会伝道師・梅花短期大学講師)